

第7巻第11号
通巻第83号

ゆたかなものはどこから生まれるか

鉄が年々高くなって、そのせいもあるのだろ。うか。そのせいであるうがなかるうが、やってはいけないことをしてくれたいと思。わたしは建築士ではないのであまり専門的にどうこう言える資格はないのだが、もう作ってしまったものはしょうがない。

「ありえない」なんてコメントは誰がみても「ありえない」んだから、世間話ならともかく、報道で意味のないコメントはやめていただきたいと思う。批判することよりも現状を知って、ここからはどれだけ取り戻せるかだけに費やして欲しい。そしてこの機会に、住居の購入を考えている人たちに、しっかりと状況を見て欲しいと思う。家を建てているならば、その現場を頻りに覗いて欲しい。できあがったマンションを買つならば、目を肥やしてから見に行つて欲しい。構造は見えないが、仕上の腕が悪ければきつとロクな建設会社ではない。本当にいい建物を建てるのは、ものすごく手間がかかることを実感してほしい。設計は、一つの線を描くのには気が狂うことだってある。施工だって、下地で仕上が決まるから、下地が勝負なんだ。最終的には表れてこないところで、ものすごい労力を費やし


ている。手間がかかるということは、時間もかかるし、お金もかかるということである。「4ヶ月」。これは一般的な住宅の工期とされているが、4ヶ月なかで建つ家はそこそのレベルではあつても決して優れたものではない。なんせ、本来は半年かかっていい建物が4ヶ月なのだ。昼休み1時間もらえる人と40分だけの人、どっちがストレスがたまらない？睡眠時間6時間の人と4時間の人、どっちが健康的？人それぞれという答えもあるけれど・・・しかし現状では、4ヶ月で建てなければ工務店は利益を得られないのだ。だからその為

に、お約束の仕上と、お約束の工法でやるしかない。施主の願望を叶える暇はないに等しい。といっても本来ならば願望を言えることすら知らない施主もいるかもしれない。お互いがびりびりとして、最後は大モメ。全てが全てでないけれど、でも、一生に一度のおそらく一番大きな買い物、こんな感じでよろしゅうございますか？ゆたかな気持ちで住みたいのであれば、建てる方もゆたかでない、まずいですよ。(と)

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

今日の紙面から

二面からすライブラリー)
アート「ピカソ・ダイアリー」
本「ダーク」
三面(ロンドンレポート)
床屋さんと夕食
(英語)
ローサ・パークスさん死す。



からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

ぶつとおならをする。あるいは、ふうーと音とも言えぬ衣擦れの如きひっそりしたものかもしれないし、ほかーん、というような爆発音のような豪快なものかもしれない。まあ、兎に角、放屁。どういいう仕組みでお腹の中で生産され排出されるのかは判らないけれど、この世に生を受けて以来の長い長い付き合いである。私の家族や友人なども、時折ぶうぶうとやっているとところから考えて、まあ、人間なら誰でもするものなんだろうな、と思う。尤も、アイドル歌手や銀幕に輝く方々はおならなんてしませんよ、という話は幾度となく耳にする。確かに、シャーロット・ランプリングがぶーなんて姿は想像できない。それはそれで人間らしくて好感度が上がる場面となりそうな気もするけれど。

出物腫物所嫌わず、という言葉があるけれど、実生活に於ては、気を遣わざるを得ない場面も少なくない。例えば、エレヴェータの中ではおならをすることは相当に憚られることだし、未だ嘗て、エレヴェータの中で豪快にぶうと放屁した人を目にしたことはない。

何故、それが憚られるのかというと、おならには、^某かの臭気が付き物だから、というのが一つの理由であろう。あまり匂わない場合もあるけれど、基本的には腸内で発生した腐敗ガスのようなものなのだから、それなりの匂いがあるのは当然である。実際に匂いがあるかないかという問題

だけではない。人前で放屁すべからず、などという法はないだろうけれど、匂いがかつたとしても、遠慮すべきものと思われている。そういう慣習。

それは、エレヴェータのような狭い空間に限られたことではない。例えば、会議室や教室、電車の中なんぞでも放屁行動は憚られます。要するに、公衆の面前では……と言つて良からうかと思われる。

では、公衆ではない面前ではどうかというと、これはその関係の有り様次第というところ。寝転がってテレビを眺めながら、この小泉てえのはとんでもねえ野郎だなあ、ぶーっ、なんてやると、かみさんが、ほんとだねえ、おまえさん、ぶうっ、なんて応える。遠慮のない間柄というのが、羞恥心の不足した関係といべきか。そんな図も、私が暮らす貧乏長屋であれば、似合わないことはないけれど、その一方で、主人の前で放屁など^{以外}、其処へ直れ、打ち首に致す……などという家庭だつてないと言ひ切れない。

おならの匂いはいどのぐらいの範囲に伝わるのだろう。分子の分量やその場の空気の密度や風力など、様々な要因に影響されるだろうから、私のようなものには測定も推測も全く不可能である。しかし、測定不能であることも、おならは近くに居る人々の鼻腔をその微香で^撥。中にはむっとした気分させられる人も居るだろう。そして、むっとした気分を抱えたまま授業に臨んだとある先生様が、無意識の裡に、いつもよりは意地悪な質問を発したりす

(最終面に続く)



Books

ダーク・DARK

桐野 夏生 (2002/10/28)

ISBN:4-06-211580-8

出版社：講談社

三口は大変な事になっちゃってますよ。出だしからして「四十歳になったら死のうと思ってる」ってとっから始まるわけですが、、、。

新宿に住む女探偵、村野三口シリーズはこれで三作目か四作目。というのも関連した話が幾つかあるので、どこまでをシリーズというのか悩む所なのだ。とはいえ、メジャーな「L」を始めとする桐野節を相変わらず堪能出来る一冊。約五二〇頁からなるハードカバーだが、読み始めると一気に結末まで行ってしまう。

三口って人は、複雑なようで単純。冷静なようで情熱的。慎重なようで軽率。もしかすると、桐野本人によく似ているのかもしれない。しかし、結局は「女」という事は変わらない。少なくともこの一冊からそう読み取れる。元々は、血の繋がらない父親が極道のお抱え調査屋で、三口が広告代理店を辞めたのきっかけに探偵稼業を引き継いだ格好になった。一作目から根底に脈々と流れる、女性ならではの愛憎劇と探偵モノという切った張ったが微妙な距離感を保ちつつ話は進んで行く、、、こちらは良かった、、、のだが、、、。今回の作品でグツグツ煮えてた鍋が一気に吹きこぼれた感じと言えれば解りやすいかもしれない。つまり、主人公三口が、というより桐野自身が弾けてしまったような展開を見せる。桐野本人が、元々このような展開を想定して三口シリーズを創作したのか、場当たり的に新展開させたのかは、当の本人に訪ねてみないと回答は得られないが、何れにしろ大変興味深い展開を読者に与えてくれた事には感謝せざるを得ない。次はどのような手で我々を楽しませてくれるのか、とても楽しみである。

しかし、昨今の事象を鑑みるに、事実は小説より奇なり」という言葉を全小説に献上しよう。

(小張寅僧)



Picasso 2006 Deluxe Diary

teNeues、2005年、ISBN: 3-8327-1268-2



Art



これが、私の来年用のダイアリーである。基本的には、よくある見開き二週間の予定表の類。どっぶりコンピュータ生活に浸っている上に、外出など殆どしないので、ここ最近紙の手帖なんざ使っていなかったのだけれど、心機一転。こんなものを買入してみた。

どのメーカーのものを使っても大差ないだろう、とは言える。けれども、その小差が気になるのである。で、結局、三種類を購入した中で、この一冊を選ぶに至った。

紙も良いし、デザインも良い。けれども、それは所詮は気のもの。いかしたノート活かすか否か、勿論、使い手次第である。

(全大)

(一面から続く)

ることもあるやもしれぬ。それに苦しめられた生徒が不愉快な気分を抱えたまま家路につき、ちえっ、などと舌打ちをして石を蹴ったら、果塗りのペンツのボデイに当たって、降りてきたのは明らかに専門の御方(ごうかた)のようで、こりや、ドイツまで空輸して全塗(ぜんぞ)やなあ、どないしてくれんねん……などと、風が吹けば桶屋(かづ)的なことを想像していくこともできなくはない。勿論(もちろん)、とてももありそうにない仮定の話に過ぎないけれど、事実は小説よりも奇なり、という諷刺(ふうさ)もあり、絶対に起こらないとは限らない。だからといって、実際に起こるかどうかが試してみることがあって、エレヴェータの中でおならをしてみたりする人が続出して困るけれど。

誰かのおならが引鉄(ひきでん)になってペンツの空騒(そらさわ)ぎが發生するなんてことを想定できるのも、それはこの世界が一繋(ひとつ)がりのものだからである。一つの何かは大なり小なり他の何かに影響を与えずにはいられない。そういう連鎖(れんさ)が常に起こり続けている。という



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

ampm marusho
あいロード商店街
新井薬師前駅→

Bar&kitchen
Kanna

早稲田通り
中野通り
中野プロードウェイ
中野駅↓

営業時間
平日・土曜日
11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日
17:30~25:00

定休日
毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
第1三宮ビル1F
Tel : 03-5343-1316

bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

より、それが世界というものなのだ。人がそれを意識しているか否かには関わりなく、生きていても死んだ後でも、兎(うさぎ)にも角にも、私たちは周囲に何らかの影響を与え続けているし、影響を受け取り続けている。これは避けようがない。仮に、私が家に引き籠(こも)もって……仮にではなく、事実、概ね引き籠もっていますがね……外界との連絡を一切絶(き)つたとしても、最近、全く外に出てこないね、やばいんじゃないか、などと、友人知人の心を乱したりする訳で、心乱れた友人が雑念(ざつねん)に気を取られ、ハンドル操作を誤(まちが)って事故を起こし、ぶつかった相手は運悪く黒塗(くろぞ)りのペンツで、こりやドイツに空輸して全塗やなあ……などと、またもや風が吹けば何とやら。

同じことなら、私としては、幸福な連鎖を望む。同じような状況下(じょうきょうげ)でおならに見舞(まな)われても、授業の前には、今日(けふ)き、エレヴェータの中でぶうっつなっておならした人がいたよ、あはははは、などという態度(たいど)で伝え、一笑着(わら)ってリラックスした生徒(せいと)たちは勉強(べんきやう)も捗(はか)り、気分良く家路(かじ)につく。母(はは)さん、今日の授業(じやうぎ)は楽しかったしよくわかったよ、なんてことに

なれば、じゃあ、勘六(かんろく)の握りでも取りましようね、なんてね。どうせなら、こつこつ桶屋(かづ)の儲(たく)り方(かた)の方が良い。

そんな訳で、私は自らの幸福を指し、実現すれば当然(たうぜん)にここにこし、実現しなくとも未だ(いま)来ぬ幸福を期待(きたい)してここにこし、要するに、常にここにこし続けて、幸福な気分を振り撒(ま)きに振り撒き、周囲に幸福の風(かぜ)を吹(ふ)かせ、身近(みぢか)な君(きみ)にも遠く(とほく)の君(きみ)にも幸福の風(かぜ)を浴(あ)びせたい。君(きみ)が今(いま)より少しでも幸福になれば、君(きみ)から発(は)せられる幸福な気分(きぶん)が君(きみ)の周囲(しゅうい)を包(か)み、君(きみ)の周囲(しゅうい)の人々(ひと)も……って、そんな幸福の連鎖(れんさ)は如何(いか)がだるうか。

ぱつと読むと、何(なに)だか、いんちきな新興(しんせい)宗教(しゆきやう)じみで見えましようが、私(わたし)は、決して怪(あや)しいものではない居(ゐ)ません。尤(なほ)も、そつこつことを言う奴(やつ)に限(かぎ)って実は怪(あや)しいってのが世(よ)の常(じょう)なのでありますけれど。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第七卷(だいなな)十一号(じゅういちごう)通巻(つうかん)第八三号(はちじゅうさんごう)、無事(むじ)で発行(はつこう)できました。新聞(しんぶん)に限(かぎ)らず、これから新企画(しんきかく)目白押(めじろお)しなので、みなさんの御協力(ごきやうりき)をお願いいたします。御意見(ごいけん)・御要望(ごきやうぼう)をぜひお寄せ下さい。次号(じぎやう)発行(はつこう)予定日(よやくにち)は二〇〇五年(にじゅうごねん)十二月(じゅうにがつ)二十五日(にじゅうごにち)です。編集協力者(へんしゅうきやうりきしや)、特派員記者(ていぱんいんきしや)、及び、投稿(てうこう)を熱烈(てつれつ)にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野板上駅

ファミマ